

十六銅鐸について

—岡崎家からの寄贈に謝して—

尾 関 章

On *Jūroku Dōtaku*
—as a token of gratitude
for Mrs. Okazaki's donation—

Akira OZEKI

1. はじめに

銅鐸は「稲と金属の時代」、すなわち弥生時代を象徴する貴重な考古遺物のひとつである。岐阜県博物館は、昭和62年の春に企画された特別展「濃飛の弥生時代」のための資料調査をすすめるなかで、思いがけなくも、「十六銅鐸」の寄贈を受けることになった。同銅鐸は故岡崎良吉氏（奈良市上高畑町）により、家宝として大切に所蔵されていたものであったが、同氏が逝去された後は、夫人の岡崎友子氏により保管されていた。特別展での借用をお願いするなかで、「岡崎家の郷土であり、銅鐸の出土地でもある岐阜県にお返しし、広く県民の皆様のお役に立てたい」とのお申し出を得、当館へ寄贈されることとなった。

この報告書は、友子夫人をはじめとする岡崎家の皆様のご厚意に深く感謝し、同銅鐸に関する従来の情報を整理し紹介すると同時に、今回新しく発見された情報も含めて、その特色を紹介しようとするものである。

なお、この報告書は、奈良国立文化財研究所研究指導部長佐原真氏をはじめ、多くの方々のご指導、ご教示がなければつくりえなかったものである。ここに改めて、ご厚情をいただいた多くの方々に深く感謝の意を表したい。

2. 県内出土の銅鐸（以下文中敬称略）

全国に所在する銅鐸のうち、出土が確実で現存する銅鐸について、三木文雄はその数およそ240口とし、出土地不明や紛失したものも含めた出土総数をおよそ410~420口と推定している¹⁾。このうち、県内出土とされる銅鐸は6口あり、うち1口が所在不明となっている。出土地は大垣市十六町（1口）をはじめとして、

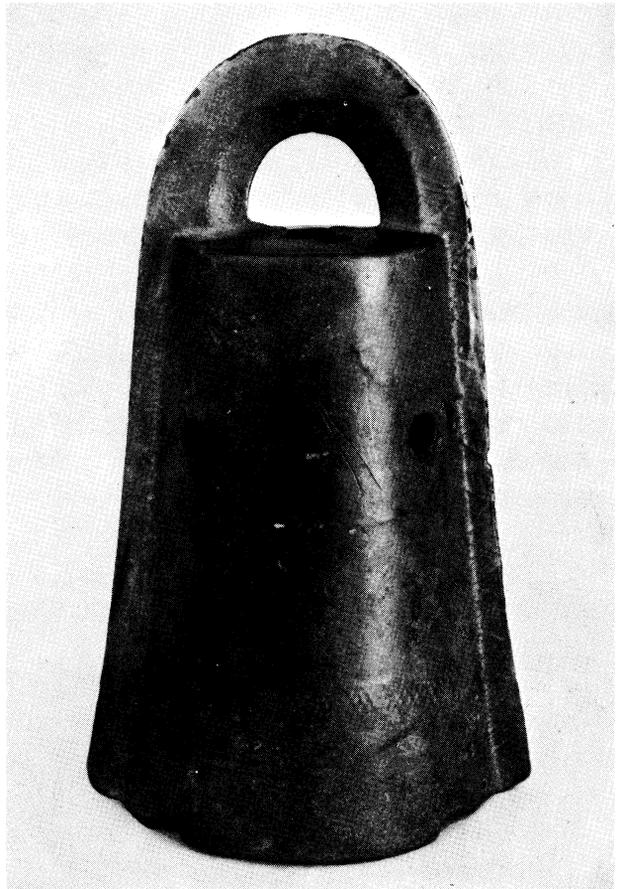


写真1

岐阜市上加納（1ロー天理大学附属参考館蔵）、可児市久々利ばんば（1ロー可児市郷土館蔵）、益田郡萩原町上呂（2ロー林由是・上野田又夫蔵）、岐阜市切通（1ロー所在不明）の計5カ所である。その詳細については、他文献を参照されたい²⁾。

3. 十六銅鐸の出土から現在に至る調査等の経過

明治34年3月 不破郡荒崎村大字十六字中林918番ノ1（現大垣市十六町）より出土。発見地について、後に小川栄一は次のように報告している³⁾。

「十六部落の東方に、北より南に向ふ堤防あり。この堤防の南端は折れて東に向ふ。明治三十四年四⁴⁾月堤防の増築工事を行ふ為め、堤防の東側水田の上を掘取る。其際銅鐸を発掘す。今其の土取場は池となり、堤防に添ひて残れり。銅鐸発見地点は、西側堤より十三間東に当る所にて、南の方堤防より四十八間北なり。この地点は池の最も東方に広き部分にして、池の中央より稍東に当る所にて、水田面より六尺下より発掘せらる。その埋没状況を聞くに、真砂層中に横たはり有りしと云ふ。」

出土した銅鐸は、荒崎村大字十六地内の地主であった岡崎勝吉が発見者より譲り受け、保管する。

大正年間 大正7年8月1日発行の『歴史地理』（第32巻第2号）に記載された「銅鐸一覧表」に、「（発見地）美濃国不破郡荒崎村大字十六字中林（数）一口（総高）〇・八五（文様）袈裟襷紋（所蔵者）一空白一」との記録が載るが、岡崎勝吉は後にこれを写し、その項の上部に「明治三十四年三月 岡崎勝吉蔵」との訂正を入れている（大正11年6月）。また、銅鐸を収蔵した木箱の蓋の裏に、次のような文字が刻まれている。「明治三十四年三月日日出於不破郡十六村字中林地下一丈許即斯鐸也 大正十五年八月八日八十一翁西疇題鐸」

昭和5年 岡崎勝吉の子息岡崎良吉⁵⁾の奈良師範学校勤務にともない、銅鐸も奈良に移る。

昭和26年 梅原末治（当時京都大学教授）は、小川栄一が採録した写真・拓本・実測の寄贈を受け、それに基づく図とメモを「梅原考古資料目録」に記している。そのメモは、「写真に依るに面著しく磨滅している。その形古式である。この銅鐸調査を要す」と記されている⁶⁾。

昭和38年 梅原末治は、岡崎家を訪ね銅鐸の調査を行い、実測図と形状の記録を「資料目録」に残している。主な記録は以下のとおりである。「此の鐸全面殆んど同じ淡緑の錫銅色を呈して一部に銹の形迹をのこすのみの頗る手なれたものであり、図文不鮮明、縁辺を除く外殆んど朦朧たるものである。厚手に仕上げられて若干の鍔摺の上、孔を見るのみである。両側上辺の双孔は正円に穿たれていて、これは鑄成後鋭利な利器で穿たれたことを示している。下辺の切り込みは不正ながら本来あったことを示し、その部分が一樣に手なれである。⁷⁾」

昭和61年8月1日 岡崎家より岐阜県博物館に寄贈される。

同 年9月4日 佐原真（奈良国立文化財研究所研究指導部長）の鑑定を受ける。このなかで、鐸身に描かれた絵画が2箇所発見される。

同 年12月18日 関市重要文化財に指定される。

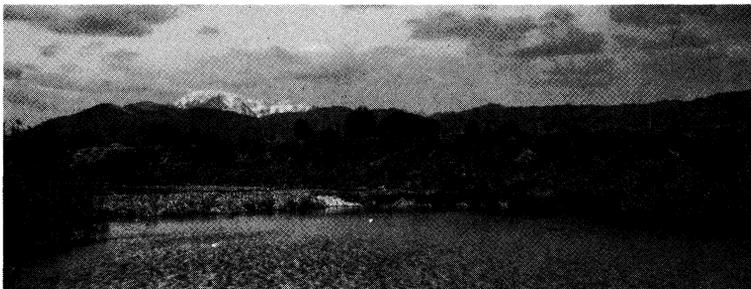


写真2 十六銅鐸が出土した池

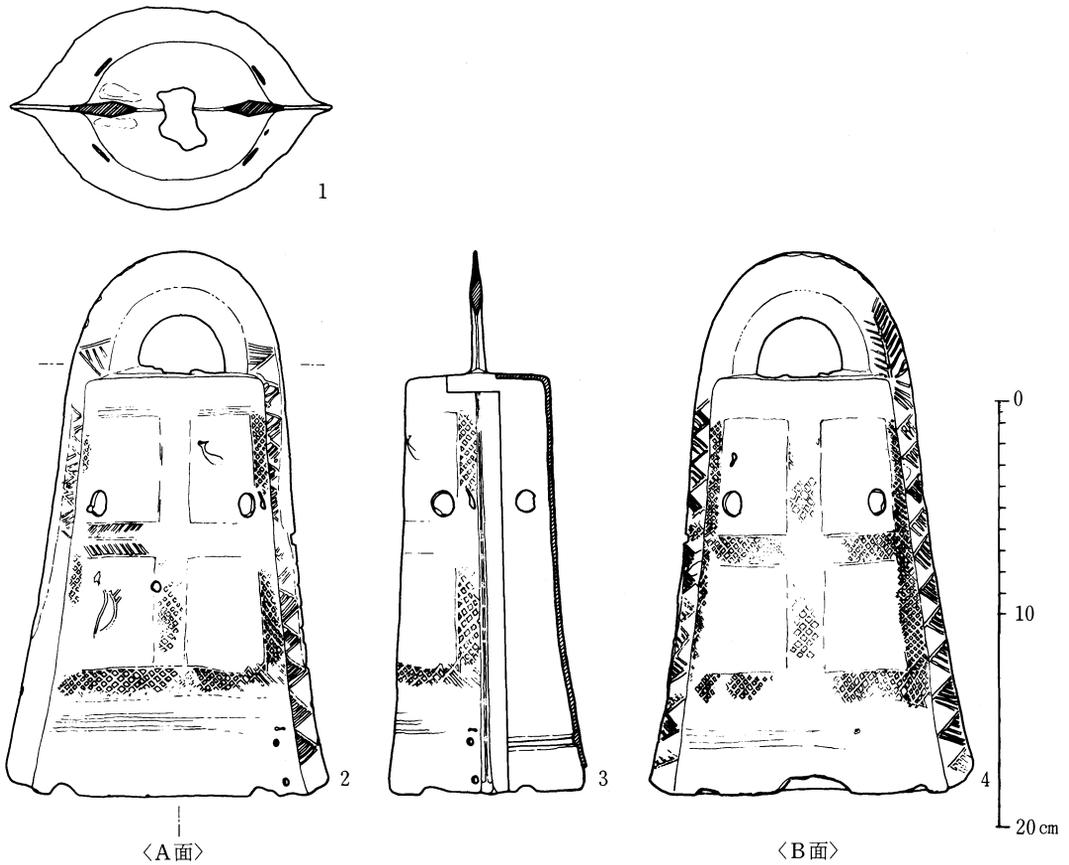


図1 実測図

4. 形状等

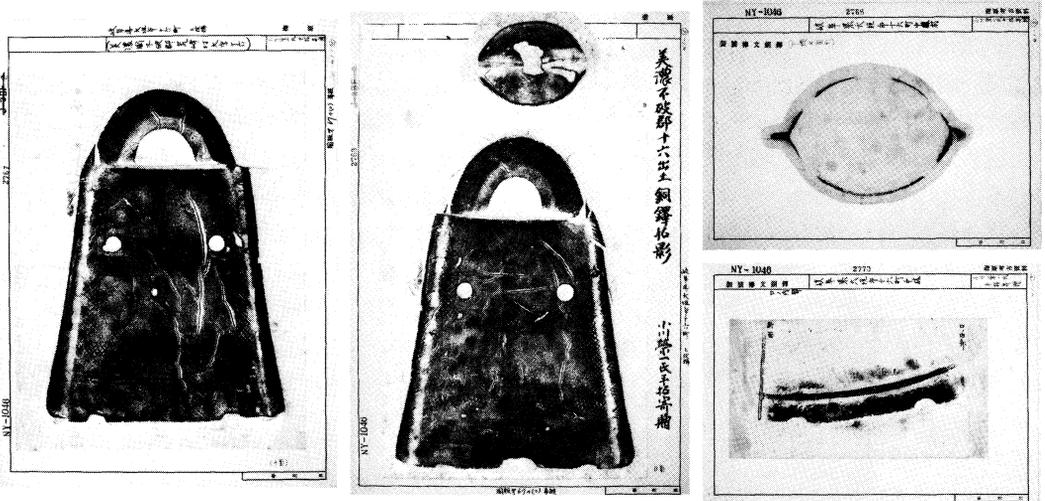
全高25.7cm(内鈕高5.9cm), 底の長径15.3cm, 舞の長径6.3cm。小型ながら, 厚手で重量感があり, 色は淡い暗緑色を呈している。鈕の外縁および鱗の縁に小さな損傷が見られるが, 埋没などによる変形や欠損は認められない。全体として表面の磨滅が著しく, 文様は不鮮明だが, 各所にその名残りを留めている。鈕は, 断面が菱形をした菱環鈕であるが, その外斜面に外縁が折れ目なく連続している。この鈕の様式は, 外縁を付けない菱環鈕式, および菱環鈕の外周に緩い角度をつけて扁平な板状の装飾が付け加わる典型的な外縁付鈕式とも多少の異なりを見せているが, 一応ここでは, 外縁付鈕式の区分に入れておきたい。鈕および鱗の文様は, A面(図1-2)の鱗および鈕の外斜面(含外縁)の一部に向外鋸歯文, B面(図1-4)の鱗の大部分に内向鋸歯文, 鈕の外斜面(含外縁)の一部に綾杉文が残る。鈕の内斜面の文様は, 両面ともに全く認められない。身は扁円筒形であり, 縦横各3本の帯で4区画に区切られた袈裟摩文あやすまで飾られている。第1横帯の文様は両面ともに完全に磨滅し, 認めることはできないが, A面第2横帯の綾杉文を除く他の文様は全て斜格子文である。A面に向かって左下の区画内には縦書きの鹿の線画, 右上の区画内には, 鹿と思われる小さな浮彫が微かに認められる。身の双孔は, ほぼ正円をなすが, 舞孔は不定形である。他の小さな孔は鑄漏れによると思われる。底縁には各面2箇所に半月状の切込みがあるが, B面底縁中央の欠損は鑄漏れによるものと思われる。内凸帯は底縁からほぼ2cmの上部に1条ある。

銅鐸の編年には諸説があるが, 大別すれば, 文様の変化を基準に考えるものと, 鈕の変化を基準にしたものに分けられる。後者は銅鐸が有する機能の変化(鈕に紐をかけ垂下し鳴らす音響具か

ら、安置し仰ぎ見る存在へ)に注目したものであり、この編年に従えば、外縁付鈕式の第Ⅰ段階に属すると思われる十六銅鐸は、弥生時代中期の初めに作られた古式の銅鐸ということになる。北九州に伝来された弥生前期の文化は、急速度で東遷するが、内陸では木曾川以南の地で足を留め、縄文晩期の文化と対峙することとなる。美濃の平野に弥生時代が始まるのは、中期以降であり、十六銅鐸がその時代のものであるとすれば、この銅鐸は、美濃における弥生時代の始まりを象徴する考古遺物ということもできよう。梅原末治は、十六銅鐸表面の磨滅を土に埋められる以前の「手なれ」によるものと判断した。その表面に認められる出土時または後の擦痕とは明らかに区別される全面に亘る磨滅は、この銅鐸が仰ぎみられる対象であったというよりも、人々の手近かに置かれ、鳴らされてきた、稲作を共にした村人たちの身近かな祭器(象徴物)として存在していたことを想像させてくれる。そしてまたその柔らかな磨滅の感触は、金属が有する冷たさよりも、人々の上に君臨する強大な権力者をいまだ知らなかった弥生人たちの温かい手のぬくもりを感じさせてくれるのである。

註)

- 1) 三木文雄『銅鐸』、柏書房 1983年。
- 2) 梅原末治(佐原真補訂)『銅鐸の研究』木耳社、『岐阜県史』通史編原始古代、『岐阜市史』通史編原始古代など。
- 3), 8) 調査委員小川栄一「十六銅鐸発見地」『岐阜県史蹟名勝天然記念物調査報告』第7輯。
- 4) 岡崎勝吉によれば3月。
- 5) 岡崎良吉の略歴は以下のようである。
 - ・明治38年11月27日 岡崎勝吉の長男として岐阜県不破郡荒崎村十六に出生
 - ・大垣中学を経て、広島高師理科卒業、大垣中学に奉職
 - ・昭和5年、奈良師範学校に転じる
 - ・奈良教育大学教授を経て、昭和46年退官、大阪産業大学教授、奈良教育大学名誉教授に就任。専攻は物理及び理科教育、特に教具の開発に力を入れる
 - ・昭和59年11月14日逝去 勲三等旭日中綬章 正四位に叙せられる。著書に『魂の進化』などがある。
- 6) 梅原末治「梅原考古資料目録」2775 財団法人東洋文庫蔵。
小川栄一が寄贈した拓本の一部を下に掲げる。 同上蔵



7) 梅原末治前掲目録 2776